



おじゃまします

～精神科訪問看護日記～

(4)

高垣愉佳

細い糸

スミレさんは50代の統合失調症の患者さん。社会人の子供さんと二人暮らしで、主婦をされている。訪問は月に1回、30分だけ。スミレさんは、血圧計のマンシェットが巻けるか巻けないかという位に太っているので、血圧測定する時には注意が必要。マンシェットがはがれてしまうと、「太ってるから馬鹿にしてるんだろ！」と気分を害してしまう。人と関係を築くのは苦手なので、訪問に行けるスタッフは私を含めて二人だけだった。それ以外のスタッフの事は「知らない人だから、いいわ。」と断られてしまう。バイタル測定をして、少し生活の様子を伺って、月々の訪問看護代をいただくやりとりをすれば、あっという間に訪問時間は終わってしまう。お金を徴収に行っているのか、訪問看護をしに行っているのか、どちらか分からなくなりそうなくらいだ。スミレさんは、繊細なので、決して家にはあげてくれない。狭い玄関で膝を突き合わせながらお話しして終わる。「月に1回くらいで30分なら、来てもらわなくてもいいんだけどね。」そう言いながらも、スミレさんは毎月きちんとお金を支払って、翌月の訪問日には待っていてくれる。毎回、決まった手順をなぞるように訪問が続いた。スミレさんほど頻度と滞在時間の短い方はおられなかった。病院受診以外は外部との人間関係が無いので、社会との繋がりを保っておくための訪問だと聞いていた。

スミレさんは、もう何十年と長く慢性期の状態で経過しておられて、波も無いし、入退院するという事も無い。精一杯家事をこなして特に問題も無く生活されている。太っておられるのと薬の副作用の関係で糖尿病や高血圧には注意が必要だけれども、それは中年になれば誰にでも言えることでもある。月に一回の、この短い訪問にどんな意味があるのだろうか？そう思い始めた頃だった。

「スマレさんに乳がんが見つかったらしい。」という情報が入った。スマレさんに電話をして、緊急訪問した。「胸が痛かったので、精神科受診時に訴えて、大きな病院で検査をしたら、乳がんらしいと言われた。精密検査はまだしていないので、よく分からないけれど、怖くてどうしようもない。」という事だった。いつでも訪問ステーションに電話してくれて良いこと、訪問回数は増やせること、受診に同行することも出来る事など、訪問ステーションが協力出来ることを伝えて帰った。

糸の力

しばらくして、スマレさんから初めてステーションに電話がかかってきた。「もう、だめ、怖い～、どうしたらいいの？私、病院行けない～。」電話の向こうから取り乱したスマレさんの声が響く。怖くて検査結果を聞きに行けないということだった。受診の日時を確認して、病院で待ち合わせて同行受診することになった。勤務予定外の日だったが、直行直帰で訪問することにした。何しろ、スマレさんが自分から何かを求めて来るのは訪問を始めて以来ということだったので、SOSを出してくれたということは、ある意味人との関係を築けたということでもあるので、今後の為にも今のスマレさんの行動を大切にしたいと思った。

当日、病院のロビーで待っていると、不安そうに全方向を見渡しながらかスマレさんが病院に入って来た。「スマレさん！」と声をかけると、「ああ、来てくれたんだ～。ありがとうね～。私、どうしたらいいの？」と言うので、受付をして受診予約表を確認した。すると、何と、呼吸器科の受診予約日となっていた。「スマレさん、これ、呼吸器科って書いてあるよ。」と言うと、不安で取り乱していたのが一変して「え？今日、呼吸器科の日？ああ、じゃあ私、間違ってたわ。どうしよう。ごめんね。私、何でこんな間違いしたのかしら？もう、嫌になっちゃうわ。今日は睡眠時無呼吸の受診の日だった。私、よっぽど混乱してたのね。大騒ぎしてごめんなさい。」と恥ずかしそうに大きな身体を小さくしていた。せっかくなのでと、診察の順番を待ちながら、いつもの短い訪問では出来ない色々な話をする機会となった。

何かあれば、相談出来るという体験をしたスマレさんは、落ち着きを取り戻して、受診を継続し、入院して手術も受ける事が出来た。

スタッフ一同ほっとしたのもつかの間、今度は「スマレさんが退院したらしい。」という情報が入って来た。確か手術を受けてからまだ5日目だった。乳がんの手術看護は看護学校の実習で体験したが、術後5日目で退院というのはありえないスピード退院のように思われた。医学の進歩によるものなのかなあ？と首をひねりながら、スマレさんの家へ向かった。スマレさんは、確かに退院して家に戻っていた。退院時情報提供書を病院からあずかってきたというので、読むと、どうやら無断退院ではないようだった。しかし、私の嫌な予感の中していた。スマレさんの胸には張り裂けそうなくらいの浸出液が溜まって、手術痕からあふれ出し、大変な状態になっていた。発熱もしていた。スマレさんに、今すぐ病院に行った方がいいと伝えたが、「だってもう退院していいって言われたもん。それにもうすぐ半年に一度の町内の掃除当番も回って来るし。」と拒否されたので、直接病院と連絡を取る許可を

もらい、病院とも相談の結果、スミレさんは再び再入院することとなった。

スミレさんは、あまり自分からお喋りをする方ではない。「大丈夫です。」「もういいです。」などと言葉少なに会話されて、出来る限り人との関係を少なくしようとされる。また、とても繊細な所もあるので、なるべく人に迷惑をかけないようにと極度に気にされる。その辺りの事も病院側に伝えて、配慮をお願いし、スミレさんの術後経過は何とか事無きを得た。

情報

スミレさんが入院する際に、精神疾患を持っておられることは精神科から伝わっていたはずだ。服薬されている薬剤情報の提供もあったと思われる。けれど、病名が伝える情報はあまりにも少ない。1回目の入院では病院側に病名だけが伝わって、スミレさんの人となりには伝わらないままで終わってしまった。月に1回30分の細い関係を長く続けたことで、病名だけではないスミレさんの特徴を理解することが出来た。続ける意味があるのかな？と思うほどの低頻度と短時間の訪問だったが、カルテの目的にあった「社会との繋がり維持」の為には、細く長く関係を続ける事が大切なのだとつくづく実感した。